

鈴木大拙『日本の靈性化』 における神道批判

神道宗教学会第76回学術大会
2022/12/4

由谷 裕哉

(金沢大学客員研究員, 小松短期大学名誉教授)

1

構成

- ▶ 1 問題の所在
- ▶ 2 『日本の靈性化』構成と概要
- ▶ 3 第三講「神道の非世界的性格」概要
- ▶ 4 大拙の靈性概念との関わり
- ▶ 5 小括

2

1 問題の所在

- ▶ 鈴木大拙(1870-1966)の一連の**神道論-神道批判**のうち、『日本の靈性化』(法藏館, 1947)を取りあげて考察する。
 - ▶ なお, 煩雑さを避ける為, 年次表記は以下, 引用箇所には元号で表示される以外は西暦を用いる。
- ▶ 大拙が戦時下から提唱するようになっていた**“靈性”**概念との関わりに注目。
- ▶ 加えて, 同書が出された**占領下**という条件にも留意。

3

- ▶ 『日本の靈性化』(1947)を、『日本的靈性』(1944), 『靈性的日本の建設』(1946)に続く**“靈性三部作”**と見てしまうと, 敗戦-占領期という問題が見失われる。
 - ▶ 大拙の神道批判であれば, 『日本的靈性』前に『文化と宗教』(1943)にも見られる。
 - ▶ 因みに**“靈性”**概念は, 本格的には『浄土系思想論』(1942)より(⇒後述)。
 - ▶ 『日本的靈性』には「「大東亜」を引くくつて一つにして, それを動かす思想」のような**戦時言説**が見られる; それ以前は, 由谷[2021]参照。
 - ▶ 『靈性的日本の建設』の「序」に, 「今は言論は自由になった」とある;
 - ▶ ↑つまり, 敗戦を挟む違いは**検閲の有無**。

4

- ▶ 『**靈性的日本の建設**』(序に「**昭和二十年初冬**」)と『**日本の靈性化**』(序に「**昭和二十二年三月**」)との違い；《占領下では他に、神道や国体を論じた小稿が10本前後あるが....》
 - ▶ ↳ 前者の後で...；
 - ▶ 1946.4；大拙が昭和天皇，香淳皇后両陛下の御前で「**仏教の大意**」を御進講。
 - ▶ 1946.11.3；**新憲法**発布(『日本の靈性化』第七講で新憲法を礼讃)
 - ▶ 大拙と**占領軍関係者**との接触，増えた模様；《e.g. R.De Martino, P.Kapleaur》

5

{因みに...}

- ▶ 『**靈性的日本の建設**』 批判
 - ▶ 鎌田東二『**神道のスピリチュアリティ**』作品社，2003
 - ▶ 小堀桂一郎「昭和期神道理解の二局面—鈴木大拙と和辻哲郎—」，『**明治聖徳記念学会紀要**』51，2014
 - ▶ 両批判については，由谷[2021]参照。
- ▶ 『**日本の靈性化**』 批判
 - ▶ 小林健三『**現代神道の研究**』理想社，1956
 - ▶ 同書第二講を主に批判するが，かなり感情的では。

6

2 『日本の靈性化』構成と概要

- ▶ 1946年6月に大谷大学で5回に渡って行われた講演の筆記によるとされる(つまり，聴衆の主体は真宗門徒か；出版も法藏館)。
- ▶ しかし，実際には7講に分かれており，上記のように同年11月の新憲法も言及。
 - ▶ 第一講 今日の世界と日本的靈性
 - ▶ 第二講 靈性と神道
 - ▶ 第三講 神道の非世界的性格
 - ▶ 第四講 世界国家—絶対王権—自我主義
 - ▶ 第五講 絶対主権の国家観と神国思想

7

- ▶ 第六講 国体観念の解剖
- ▶ 第七講 今後の日本を影響するもの，科学的世界観とアメリカ文化
- ▶ 見られるように，第一講で「**日本的靈性**」「**靈性的自覚**」などの解説，第二講と第三講で神道論および神道批判，第四講から第六講で**行過ぎ国家主義**(ウルトラナショナリズム)批判，それと絡めて**国体批判**，第七講で**アメリカの科学的優勢と自由を尊ぶ文化**が彼らの**靈性的直覚**に基づくこと+新憲法の称讃，など。

8

- ▶ つまり、同書で**神道論－神道批判**が展開されるのは、主に第二講と第三講。
 - ▶ 第二講；記紀の神代の巻の検討から、**和辻哲郎**(『尊皇思想の伝統』1943, および『日本の臣道』1944)の批判。末尾近くで本居宣長を批判。
 - ▶ 第三講；帝国主義的国家観と結びついた“神道的心理態”を、対象化して批判。その過程で島国根性に触れ、**下程勇吉**『日本倫理を貫くもの・まこと』1944)を取りあげ、そこにおける**世界性の欠如**を批判(下程は教育学者)。
 - ▶ つまり第二講と第三講での**神道論－神道批判**は、第四講以降の**行過ぎ国家主義批判－“神国”観**

9

- ▶ (続き)批判を踏まえて；⇒第七講において**新憲法＋靈性に基づくアメリカ文化**をタイトル「日本の靈性化」の指標とする、という立論の前提となっている。
- ▶ とはいえ、『日本の靈性化』には『**靈性的日本の建設**』と明らかに異なる**神道論－神道批判**が見られる点で、注目されるのでは。
- ▶ なお、発表者は本書第一講および第二講について検討した拙稿を投稿中なので、本発表では**第三講**の考察に焦点を絞る。

10

3 第三講「神道の非世界的性格」概要

- ▶ 以下、頁数は『鈴木大拙全集』第8巻による。
- ▶ 帝国主義的国家観、八紘一宇イデオロギイと結びついた**神道的心理態**と比較するために**普賢菩薩の十願**をあげ、そのうち九の「恒に衆生に順ふこと」を経文より意識して示す(pp.289ffff.)。
- ▶ ここで順う対象とされる衆生は、**生きているもの以外も一切が衆生である**、とする。このような**大悲願**がないと、島国根性に限られてしまう(p.292f.)。

11

- ▶ 下程勇吉『日本倫理を貫くもの・まこと』の概要へ。同書では「まこと」、**正直**を神道における倫理規定の原理とするが、**靈性的直覚**に至っていない；⇒**靈性的直覚**の見地からは、絶対も相対も、無限も途中も無い(pp.294f.)。
- ▶ 神道家の知性分別の境からの**絶対への憧れ**が、天照大神の御心を求めた(p.295)。
- ▶ また下程は、日本の神々は超価値的絶対性を持つとするが、**倫理や政治において絶対と云ってはいけない**。日本だけが神国ではない。漢土もユダヤも神国である(p.298)。

12

- ▶ 神道家は、なぜ神の中心を我が国に限定するのか。自分の国のみを神国ということは、**軍閥**のイデオロギイとして都合良く、戦争にならなければならぬようになっている。「大君に仕へまつる」は明らかに封建思想であり、人間性の蹂躪である(pp.302ff.)。
- ▶ 佐久良東雄(あずまお)という尊皇神道家の言のように「御日様」を受け入れない人々を懲罰するというのは、逆らう者を皇軍に対する「朝敵」, 「賊軍」, 「鬼畜」とみなし、その戦を「**聖戦**」とする論理である(pp.304ff.)。

13

- ▶ 天照大神の御心のように**軍閥**が依拠したものは、武力で押し売りしなければならない島国特有のものであった(pp.306f.)。
- ▶ 神道の絶対観は、闘争心理の培養に役立つのみ。垂下的に神々の系譜を規定し、その下に臣民を置くので、封建主義的な政治機構となる。「天皇帰一」, 「臣道実践」などの標語を実践する当事者は、自主性も自律性もない。**自由**とは横の繋がりであるが、それは皆無であった(pp.308ff.)。

14

{下程本<小山書店, 1944>の参照は妥当か}

- ▶ 本書第三講で具体的に引用されるのは、下程本のp.12, p.23, p.24の計3頁; 《-3つ目は、旧版全集ではp.42と誤記》
 - ▶ 下程が日本神話ないし天照大神について**超越, 絶対, 永遠**などの語で形容している箇所¹⁾に相当する。
 - ▶ 下程の立論は、記紀神話から神国思想が如何に形成されたかを, 上記の概念を使いながら説いており、大拙がそこに**世界的性格の欠如**を見るのは妥当であろう。

15

- ▶ そもそも、『靈性的日本の建設』第二篇における神道の祈り批判での**山田孝雄**(よしお)への言及も、『日本の靈性化』第二講における**和辻哲郎**批判も、穏当なロジックであることを発表者は既に指摘したことがある。
 - ▶ 由谷「敗戦をまたぐ二つの神道論：柳田國男「敬神と祈願」と鈴木大拙「日本的靈性的自覚」第二講」, 『比較思想研究』45, 2019.
 - ▶ 同「鈴木大拙『日本の靈性化』における神道論 - 第一講・第二講を中心として -」(投稿中)
- ↳ (山田, 和辻, 下程ら)**戦時下の神道論**を大拙が批判するロジックと彼の**靈性概念**とは、どう関連するのか。

16

4 大拙の靈性概念との関わり

- ▶ (以下『鈴木大拙全集』の巻数を, “全#”と略)
- ▶ 『浄土系思想論』(1942); 全6編の論文のうち, “靈性”が前景化しているのは第2論文「極楽と娑婆」。
- ▶ 無量寿経などにより, 極楽は靈性の世界, とする(全6, p.71)。
- ▶ 絶対矛盾である故に同一性が成り立つというのが靈性の論理(p.80)。
- ▶ 靈性とは, 無分別の分別である(p.82)。

17

- ▶ 『禅の思想』(1943); 全3篇のうち, “靈”が問題とされるのは第2篇「禅行為」。
- ▶ シナ民族独自の宗教経験を表象化した仮用語を, “宇宙靈”とする(全13, p.150)。
- ▶ 靈は動いて止まらないので, 永遠に無限の可能性と云える。つまり, 靈は力であり用(はたらき)である(pp.150f.)。
- ▶ 靈は, 自覚(人間が個多の靈を呼び覚ますこと)がないと, それは無と同じ; ⇒人間の靈的自覚においてのみ無分別の分別が可能(pp.153f.); 《↑宇宙靈との仮称は, 絶対の存在を表象する法身のこと; p.155》

18

- ▶ この他, 『禅の思想』と並行して戦時下で執筆されたい『禅思想史研究』三部作(1943, 51, 遺稿)にも, とくに遺稿の第3巻には「靈性的自覚」の語が頻出する。
- ▶ 例; 慧能(えのう)以降のいわゆる南宗(神会<じんね>)は絶対的一元論(全3, p.56)であり, その体用一如(p.62), 定慧不二(“定”は無分別智, “慧”は分別智, p.74)のような矛盾的自己同一に, 「靈性的自覚」を見出す(p.111)。
- ▶ しかし, 敗戦後に真宗門徒を聴衆としたらしい講演に基づいた『日本の靈性化』では, 絶対矛盾的自己同一, 支那禅宗の体用論(とくに体用一如), 無分別の分別などは, ほとんど触れられない; 《←“分別”は頻出》

19

- ▶ 具体的に, 『日本の靈性化』で靈性および靈性的自覚を提唱する第一講では... ;
- ▶ 人間の意識を知性と靈性とに分ける。仏教で云えば, 後者を般若(プラジュニヤ)に当てて良い(全8, p.250)。靈性は絶対(p.251)。
- ▶ 靈性は統一の原理であり, 大智大悲円融無礙の場所である(p.252)。分別性を本質とする知性が根源にある靈性に気づくことを, 靈性的自覚と云う(同上)。
- ▶ 親鸞聖人が法然上人に対して持たれたような絶対信を, 自分の言葉では靈性的自覚と云う(p.254)。

20

- ▶↳ 以上のように、戦時下の『浄土系思想論』『禅の思想』『禅思想史研究』で主眼だった、一種の**一元論**(対立すると考えられる2つの概念が、実は不二であることを**靈性**および**靈性的自覚(直覚)**の本義とすることから、**靈性**とは別に**知性**の領域を設定(←『靈性的日本の建設』とやや類似);
 - ▶ 本書第二講で、記紀神話や和辻の言説を**知性**のみによると非難する箇所が複数ある(pp. 266ff., pp.276f., p.281)。
 - ▶ とはいえ、**靈性を統一の原理**とする意味づけ(e.g. **大智大悲**...)も残している。

21

- ▶ 加えて、上記のように**絶対信**を**靈性的自覚**とする、という意味づけも提唱。
 - ▶↳ (真宗門徒向けだったとしても)靈性概念が、**“絶対”**という別の概念と結びついたことに。
 - ▶ その為、先に第三講を概要した時にも気づかれたように、大拙本人が述べる**絶対**概念は正しい、若しくは自明だが、下程勇吉の言説に出て来る**絶対**は間違っている、とも読める奇妙な立論に。
 - ▶ e.g.「倫理や政治などでは「絶対」と云ふことを語つてはならぬのです、...」(p. 298)。

22

他に、“絶対”を論じている箇所を引用：

- ▶ 神道家、殊にかの古神道と云ふものに執心して居る人々は、「絶対」をまともに見ることをしないのです。何か無限定のもの、無限で、無で、「**不定無相の超越者**」*と云ふものが、この千差万別の「有限界」の外にあると思つて居るのです。さうして此外に在るものが、形を取りて「神」となつて現はれるのです。これが、「**一切の根源としての神**」*だと云ふのです。此神は、「**己れ自らを不定の無よりあらはした**」*もので、キリスト教などの神とは違ふと云はれます(p.308)。

23

- ▶ *三つとも、下程著書p.13より引用。

- ▶ 大拙は、日本の神々が下程の云う「どこからか生れ出た」のであれば、「生れる」というのは時間的に生滅するのであり、空間的には豊葦原という地域内で成立する。
- ▶ したがって、時間的に生滅することは**二元的、対象的、闘争的思想**がそこから発生することにつながるから、神道の**絶対観**は闘争心理の培養に役立ち、自ら**排他性・侮他性**を築き上げざるを得ない、と断罪する(pp. 308f.)。
 - ▶ ↑二元的-対象的思想が闘争的に、は飛躍では？

24

- ▶ これ以外にも、同書第三講で神道家の“絶対”観を批判している箇所があるが(p.303, 「**相対**から離れて別の存在であると云ふ考へ」), これだと絶対は相対を含むのか、と思える。
- ▶ しかし、この箇所を含め、大拙自身の依拠する“絶対”が具体的にどのような概念なのか、記述は無い。

25

5 小括

- ▶ 『日本の靈性化』第三講における神道批判は、“行過ぎ国家主義”と結びついた戦時下の神道論を批判したもの。同じく戦時下の『**日本的靈性**』における伊勢神道の言及のように、神道説そのものを対象にした考察とは異なる。
- ▶ 一方で、下記のようなやや唐突な神道批判は、**占領軍**の影響があるのか？
 - ▶ (引用)今日の日本国民の惨苦に対して無条件に責任を負うべきは神道であります。連合

26

(続き)軍が神道を目して狂信(fanaticism)及迷信(superstition)と云ふのは、固より当たれると云つてよいのです(p.294)。

- ▶ 占領軍の鸚鵡返しと論断してしまわず、『日本の靈性化』(の第三講における神道批判)を考察することで、先に見た“絶対”の捉え方(+靈性と知性との関係性)のように、大拙の**靈性**概念のほつれ、ないし揺れのようなものをそこに見出せる可能性がある、と捉えたい。

27

{ここまで書誌をあげなかった参考文献}

- ▶ ステファン・P・グレイス「鈴木大拙の研究」(駒澤大学大学院博士論文, 2015); 《占領期における大拙とDe Martinoらとの交際+海外研究者の大拙評価<含・大拙の英文和文著述の違い>; [online](#)》
- ▶ 大熊玄「鈴木大拙による神道と「靈性」の比較」, 『比較思想研究』44, 2018; 《『日本的靈性』における神道論を、大拙の靈性概念と併せて考察》
- ▶ 由谷裕哉「鈴木大拙と柳田國男の占領初期における神道・神社論」, 『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』6-24, 2021; 《主に『靈性的日本の建設』第一篇の考察+戦時下における大拙の戦時言説を抽出; [online](#)》

28